帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集（1997）

中世在地土器の実態

浅　野　晴　樹

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．貯蔵具
Ⅲ．調理具
Ⅳ．煮炊具
Ⅴ．食膳具
Ⅵ．まとめ
Ⅶ．おわりに

Ⅰ．はじめに

今回私に与えられた題目は「在地土器」と言うテーマである。在地土器という概念は極めて曖昧であり、ある一面では、このような普通名詞的な用語を冠した土器を全国的な視点で扱うことは冒険であるかもしれない。ここで扱う在地土器については私なりに次のように解釈した。

基本的には広域流通品に対して狭域な分布を示す製品と言える。その製品の多くが日常雑器を主体とし、瓦質、土師質の製品が主体である。須恵器系、瓷器系の製品が一国ないしは数国を流通範囲とする陶器類についても、在地土器と定義してもおかしくはない。

このような在地土器は、西日本の遺跡の遺物組成を見るならば、遺跡の階層性を問わず遺物組成の9割以上がこの製品によって占められる場合が多い（菅原1989）。東日本の遺跡においては地域的な差が著しいが、中世後半においては調理具、煮炊具等を主体に在地土器の占める割合が高いことが判っており、西日本同様に在地土器の占める割合が高くなる状況を認めることができる。このような在地土器の存在は階層を越え、地域的な連鎖と相違の下に当時の地域性の把握と流通のあり方を解明するのに極めて有効な資料と言える。

そこで、ここではそれらの在地土器の中から、日常容器として挙げられる幾つかの器種を取り上げ、それらの土器の特徴と分布について比較検討してみたい。扱う容器は、貯蔵具としての壷・甕、調理具の片口鉢・擂鉢、煮炊具の釜・鍋、食膳具としての椀・皿である。

II. 貯 蔵 具

壺、甕などの貯蔵具は保水性が重要である。そのため土師質や瓦質の在地産のものよりも、より保水性の高い瓷器系や須恵系の陶器に頼る場合が多い。西日本では備前窯、東播などの製品や、東日本では常滑、北東日本海域では珠洲、越前などの陶器が広く使用されていた。これらの広域流通品に対して狭域な流通圏を形成させる瓷器系、須恵器系の甕が祖型を広域流通品に求めながら模倣と言う形で各地に形成された。これらの流通は狭域流通を含めた形で、地域分業を前提とした状況を形成していたと判断される。

(1)西日本

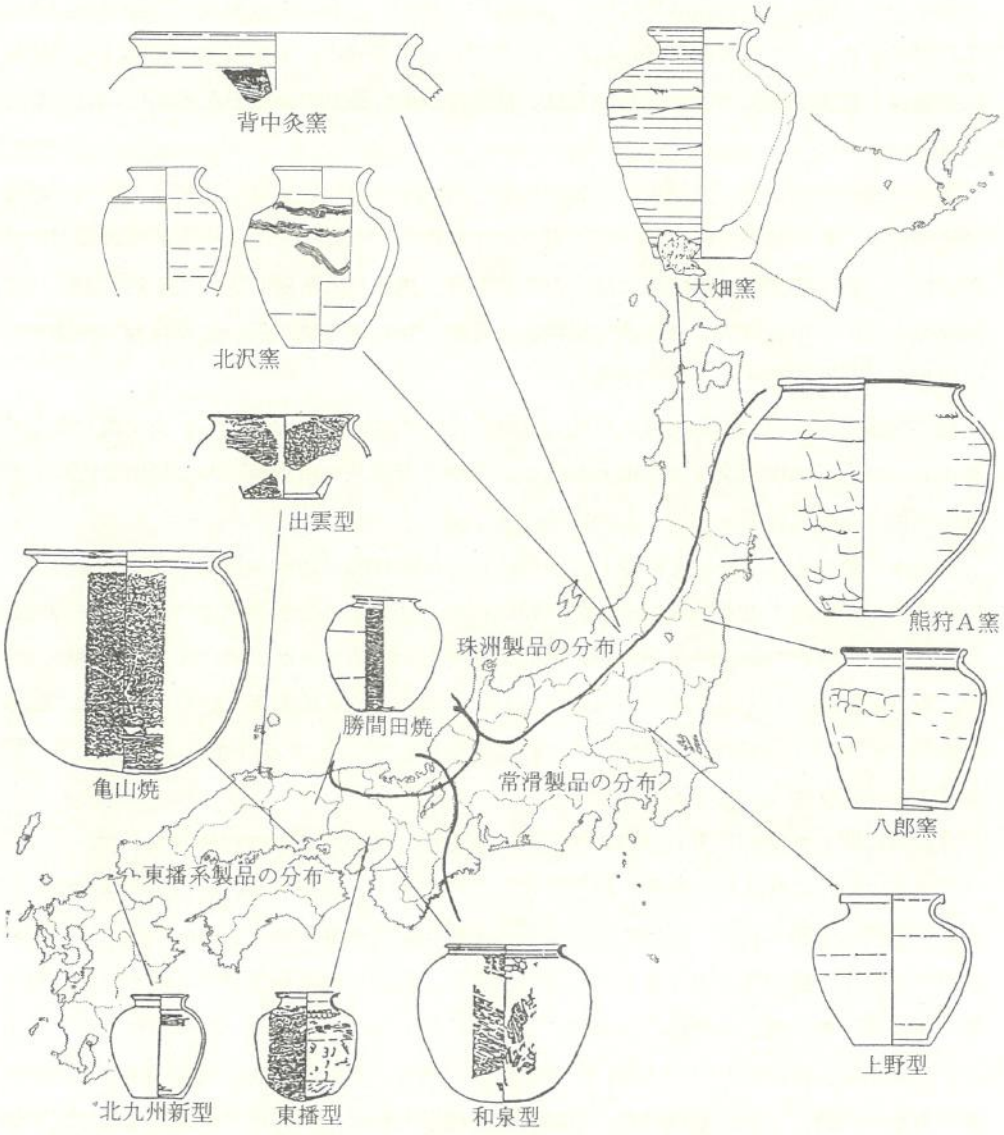
西日本における貯蔵具は、広域流通品としては中世前半代では東播系の窯製品や常滑製品が主体的に分布を示し、14世紀以降になると備前窯製品が次第に東播、常滑に代わり主体的に分布し始めることが判っている。しかし、これらの分布に関しても決して西日本全体にまんべんなく分布するわけではない。東播系は、畿内を中心に、瀬戸内、北九州などの地域において多く確認されている。常滑に関しても畿内、山陽道、そして九州北部地域がやはり主体的に供給される地域であり、他地域は点的な分布で、一遺跡における出土量も少ない。東播や常滑などの製品に加えて、中世前半においては出土遺跡数は少ないが畿内から瀬戸内の広範囲に分布する香川県の十瓶山焼があり、先の東播等の流通範囲に次ぐ領域での分布を確認することができ、広域流通ないしはそれに準ずる流通圏と生産量を誇っていたと評価できよう（荻野1993）。

これら狭域の須恵器系製品の多くが中世になって新たな出現を行ったものが多い。いぶし焼還元焔焼成のものが多く、しかし、時代が下るとともに酸化焔焼成のものが多くなってくる。亀山焼は丸底と平底が共存し、十瓶山窯、下り山窯などでは平底の独自の形態を生産したと言い、しかし、西日本各地に同様な生産が分布しており、それらをすべて一元的に論ずることはできない。

須恵器系の在地窯とは少々趣を異にする製品として、和泉型・肥後型がある。これらは須恵器系の範疇とは言えない瓦器（瓦質土器）と分類されるものである。この製品も13世紀代に生産を開始し、多くの在地窯製品が14世紀後半以降姿を消していく中で、中世後半に至っても、甕を主体に16世紀頃まで土師器化しながら生産を継続させている（鋤柄1986）。

(2)東日本

東日本における貯蔵具の分布は、西日本同様に広域流通品と狭域流通の製品が地域間分業体制で分布する。広域流通品としは太平洋側に常滑があり（赤羽1995）、日本海側には珠洲や越前などの焼き物が広く分布する（吉岡1991）。大きく分類すると東北の日本海側



第1図　鎌倉時代中・後半の貯蔵具の分布（縮尺不同）

から北陸にかけては須恵器系を主体とした焼き物が12世紀から13世紀にかけて形成された。秋田県のエヒバチ長根、大畑窯などがそれである。中世初期のエヒバチ、大畑にしてもその生産規模は想像以上に多く、エヒバチの資料などは平泉においても検出されていると言われ、地方在地窯と単純には括れないものである。それは12世紀の水沼窯製品についても言えることである。

北陸でも新潟県内には13世紀から14世紀にかけて須恵器系の北沢窯跡、背中炙窯跡、瓷器系の赤坂山窯、狼沢窯などの窯跡が形成されていた。一方、太平洋側では13世紀から14

世紀にかけて福島県から宮城県にかけては大戸、梁川、白石、伊豆沼などの瓷器系の窯が多数形成され、この地域の消費に対応したものと推測させる。太平洋側の窯跡は生産規模は想像以上に大規模であり、当時の宮城、福島地域の貯蔵具のかなりを占めていたとも言われている。

関東に目を向けると、北関東に西日本地域でもあまり見ない形態の瓦質壺の出土が確認されている。この製品は群馬県、埼玉県、栃木県にまたがり分布し、主として蔵骨器に使用された。同じ関東でも南関東では、全く在地産と思われる貯蔵具を中世全般にわたって確認できない。甲信地方では信濃に13世紀以降甕と片口鉢専焼に近い生産体制へ転換した中津川窯製品を確認することができる。

14世紀後半以降の生産状況は、東北、北陸、さらには関東においても、全く姿を消してしまい、さらには南関東などの地域を除くと常滑の貯蔵具も出土遺跡および遺跡内における出土数とも急激に減少することが指摘できる。

東日本に認められた在地産貯蔵具の系譜は、12世紀以降、新規な生産の開始として捉えられるものがほとんどであり、そして、13世紀から14世紀の瓷器系および須恵器系の製品も常滑、珠洲などの広域流通品との技術的共通性を認めることができ、大方の在地製品はこれらの模倣品としての生産であったとされる。しかし、在地生産成立の背景は単に広域流通品の補完的な役割のもとに成立した程度とは言えず、極めて積極的な成立をそこに認めることができよう。

貯蔵具に関して東西日本の分布状況を見てきたが、気づいた点に触れてみよう。

西日本における貯蔵具の分布を類型化することは難しいながらも、その分布状況から幾つかの類型に分類される。広域に分布する常滑焼、備前窯焼があり、ついで瀬戸内一帯に広がりを示す十瓶山焼のようなものもある。また、数国単位に分布するものとして、周防型や肥後型、亀山焼、和泉型等がある。しかし、最も多いのはほぼ一国範囲に分布するもので勝間田焼、筑前型、上一坊型、出雲型などである。中世前半代は須恵器系のものが主体であるが、同じように須恵器系の東播製品を模倣した河内・和泉型に代表される瓦質製品が特徴的なものとしてあげられる。瓦質製品は他に山陰の一部や瀬戸内中部、九州などの西日本各地で確認されている。

一方、東日本においては14世紀頃までは、西日本同様に広域流通と東北・北陸に見られる数国ないしは一国程度の分布を示す瓷器系・須恵器系の貯蔵具とがあった。そして、北関東のみに瓦質の生産が分布した。

このような在地系の瓷器系、須恵器系の生産も14世紀後半以降は全くその姿を見なくなってしまう。在地土器生産の消滅の背景には常滑や越前などの広域流通品の生産増大と流通拡大によるものと考えられてきた。

しかし、実際のところ14世紀後半以降の常滑甕の分布は、東日本全体を見回しても増加するとは言えなく、むしろ大半の地域では減少する傾向にある。西日本においても、丁度同じ14世紀以降、東播系や常滑窯製品、さらに各地の狭域製品の多くが姿を消して行く。その一因として、備前窯製品の増加が確認されている（伊藤1995）。

ただし、中世後半の備前窯大型甕類は単なる貯蔵具の領域を越えた製品であり、日常雑器的な貯蔵具としての機能を保有した甕は、やはり備前窯においても次第に減少して行くものと判断されるのではなかろうか。

また、15世紀から16世紀にかけての東北、関東及び信濃の城館跡における貯蔵形態の出土状況は激減しており、遺跡によっては全く貯蔵形態を検出させない遺跡もある。このような状況は、西日本においても地域的には同様な状況を推測できるところがあり、一元的に焼き物の貯蔵具によって占められていたわけでもない。貯蔵具イコール焼き物と言う一元的発想は否定し、木製の桶などの使用も想像を越えた状況であったと推測されよう。ただ、それとても、単純に西日本においては中世後半代は備前窯、そして東日本は桶と言う単純な構図も肯定できるものでもない。

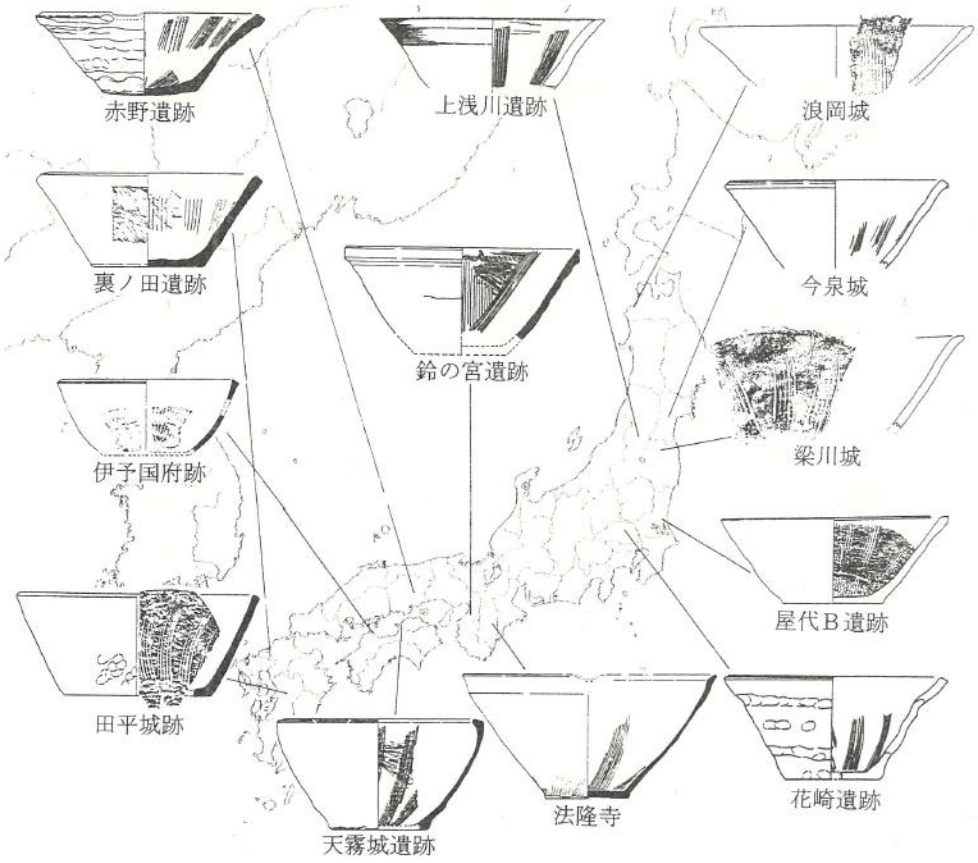
Ⅲ. 調 理 具

調理具と規定する製品としては、石臼、片口鉢、擂鉢、卸皿などがあり、中でも片口鉢・擂鉢は我が国の中世社会の焼き物を代表する製品と言える。全国各地に瓷器系、須恵器系、瓦質、土師質などの擂鉢が分布することが知られている。先の貯蔵具同様に、広域的な広がりを示す製品と狭域的に一国なしは数郡にのみ分布するものもあり、在地土器の中でも多少の疎密は認めながらも、列島全体にわたって分布を認めることの出来る貴重な資料と考えられる。

(1)西日本

備前窯、東播系などの須恵器系陶器が広く西日本各地に流通していたことは知られている。中世前半代においては広域流通品は東播系の片口鉢が主体的に西日本各地に拡散していた。このような広域流通品を祖型として西日本各地に須恵器系の地方窯が出現した。九州では樺万丈窯、下り山窯、大宰府などで生産の事実が確認され、中国地方においても亀山焼などで須恵器系の片口鉢の焼成が行われていた。また、焼成地の不明な瓦質の片口鉢が各地に出現する（荻野1990）。

13世紀後半には備前窯焼においては片口鉢から擂り目を有する擂鉢に生産が変わり、この備前窯焼は14世紀以降次第に生産を増大させて行き、各地にその販路を広げており、14世紀後半以降各地でこの備前窯製品を模倣したと思われる擂鉢の出現を確認することがで



第2図　中世後半の在地系擂鉢の分布（縮尺不同）

きる。例えば畿内の和泉では備前窯ないしは東播の関連の伺われる擂鉢が生産を開始し、次第に東播系の片口鉢にとって変わり、さらに15世紀後半以降には瓦質から土師質に転換するものとされる。このような動向は一つ和泉に限ることでなく、瀬戸内周辺から四国、さらには九州各地でも広域流通品を上回る瓦質擂鉢の分布が認められる。15世紀後半以降には、各地で土師質擂鉢分布が確認される。

京都周辺部のように、中世を通して東播、備前窯、信楽、丹波などの広域流通品を主体とした製品により賄われ、在地の瓦質、土師質製品の生産は全く認められない地域も存在する。これは後に述べる中世前半の鎌倉にも通じることで消費地としての完成度の高かったことを意味するものと推測される（百瀬他1994）。

(2)東日本

東日本においては、擂鉢の分布は中世前半の太平洋側では常滑などの東海諸窯製品が主体に分布しており（赤羽1995）、日本海側では珠洲窯製品が広く分布する（吉岡1991）。こ

のような広域流通品を補完ないしは互換する形で、13世紀から14世紀を中心に各地に須恵器系、瓷器系の在地窯が形成され擂鉢が生産されている。東北地方においては、14世紀中頃まで認められた瓷器系擂鉢も、14世紀後半にはほとんど姿を消す（飯村1995）。そして15世紀から16世紀段階に至ると太平洋側でも南東北地域では擂り目を有した古瀬戸を模したもの、日本海側では越前の擂鉢を模した瓦質、土師質ものなどが分布する。これらの瓦質、土師質製品は14世紀段階まで各地に形成された瓷器系、須恵器系生産工人の転換した可能性もあるが、やや製品に連続性がなく、今後の資料分析が必要であろう。しかし、関東以西ほど量的に豊富ではなく、また、普遍的にすべての同期の遺跡から検出されるものでもないようである。

関東甲信地方においては、東北地方などとは異なった状況である。この地方は先にも触れたように常滑製品が濃密に分布することが知られており、中世前半代に在地窯が形成されていない。しかし、一部地域には13世紀後半以降、瓦質を主体とした片口鉢、擂鉢の分布が認められるのである。北関東の上野、武蔵、下野などの地域では、粘土紐輪積み、底部回転糸切り無調整の片口鉢の分布が認められる。甲信地方では松本平周辺に須恵器系の生産が認められる（浅野1991）。

14世紀後半から16世紀に至ると常滑に代わり、広域流通品としては古瀬戸及び大窯製品の擂鉢が東日本全域に広がりを示しており、この古瀬戸の擂鉢を模倣した瓦質、土師質の擂鉢の生産が各地で確認されている。その流通範囲は精々一国程度ないしは数郡にわたるものと推測される。北関東においては、初期の擂鉢は口縁部形態が片口鉢に類似しており、13世紀から15世紀前半頃まで生産されていた片口鉢が、古瀬戸搬入の影響下で、器内面に擂り目を有する擂鉢に転換したものと思われる。初期の擂鉢ほど瓦質であったが、次第に土師質に近い粗雑な作りなものに移行する傾向が強く、土師質へ転換現象は西日本に類似する。

調理具は、先に触れた甕と同様に広域流通品を祖型とし、各地に模倣品としての瓦質、土師質の狭域な分布を示す製品がつくられた。それは、中世前期から認められる地域もあったが、中世後半以降に顕著に瓦質、土師質の擂鉢などの発達が確認された。これら在地土器の成立には、西日本では、東播系片口鉢、備前窯擂鉢との関係が強く、東日本の太平洋側では常滑、古瀬戸が、日本海側では珠洲、越前、さらには東播系などの影響も想定されているところである。北関東に13、14世紀に成立した瓦質の製品は特異なもので、可能性として常滑模倣が想定されるが、整形方法や器形の特徴から遠く東播の影響を想定する考えもある。

その機能が万能調理具と言われるように極めて多様性に富んでおり、素材の違いや少々

粗悪な製品であったとしても製品として十分通用するようであった。仮に地域的な食生活上の異なりがあったとしても製品の形態などには影響がないと思われ、形態や整形、さらには素材の変化などはあるが、全国各地においてその分布が確認できることは地域間の流通圏のあり方や相互の関連性を比較検討するのに在地土器の中でも極めて有効な資料と規定できるかもしれない。

Ⅳ. 煮炊具

中世の煮炊具としては、土器製のもののほか、鉄製、石製などがあり、形態的には鍋、釜にほぼ代表される。ただ、擂鉢などを転用したものなども認められる。

古代における鉄製煮炊具の出現とその発展の異なりなどにより、明らかに西日本と東日本では中世煮炊具の形態や分布に違いを生じさせているようである。

(1)西日本

西日本各地においても詳細な分類と編年研究が進められている。各地の煮炊具の基本的な形態は土師器ないしは瓦器の鍔釜、鍋、足付釜、足付鍋などの器種に集約されるものと言える（菅原1989）。

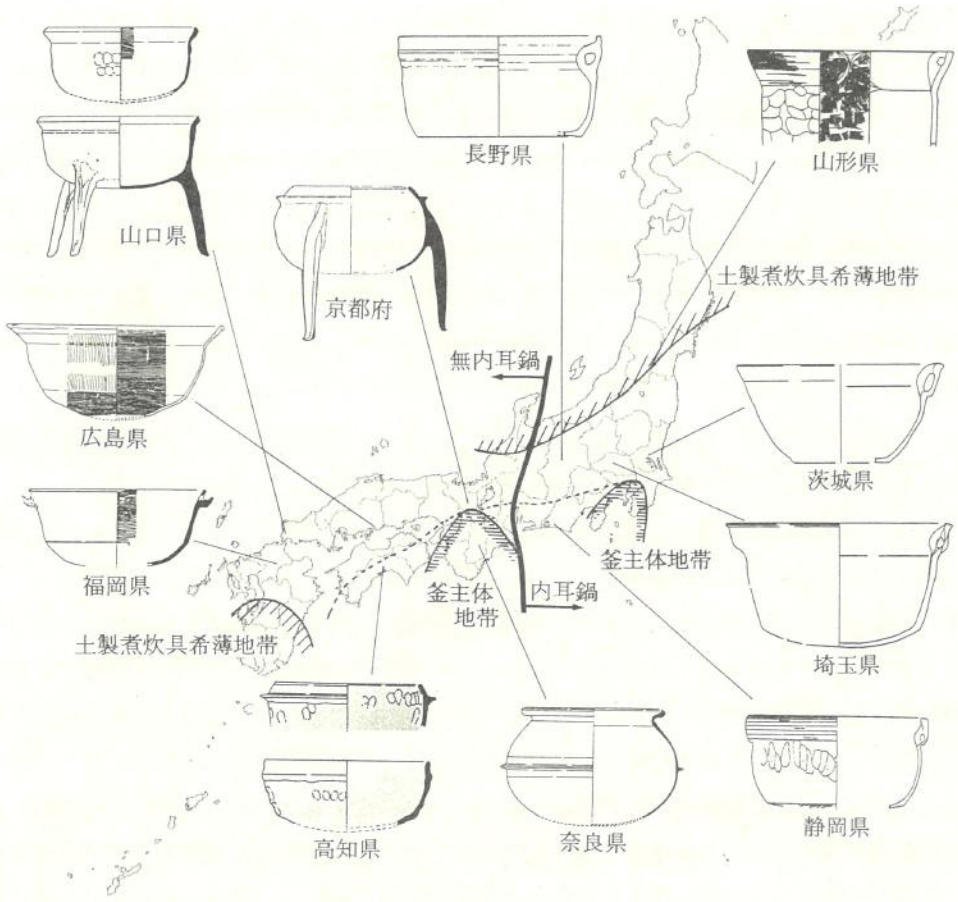
西日本の煮炊具は、古代末から中世前期にかけて土師器甕から土師器の鍋・釜に転換するとされているが、土器製煮炊具以外の製品との兼ね合い、古代以来の土器生産工人との系譜の問題など幾つかの要素が係わっているようである。

釜は西日本各地から東海地方にかけて分布を確認することができる。口縁部形態に頸部の直立するものと、屈曲するものに大別されている。和泉型に代表される球胴型釜は兵庫、徳島、高知などで分布をみることができ、京都型の短い頸部と断面方形の体部をもつ釜は瀬戸内から九州まで分布すると言う。口縁部を屈曲させる代表的な釜としては奈良の釜があり、この形態の特徴をもつ製品は、和歌山、三重、愛知を共通とし、高知の鍋についても体上半部の特徴が類似することから同一系統上の可能性が考えられている（鋤柄1995）。

13世紀以降から西日本では釜ともに鍋の出土も多数確認される。畿内では釜とともに鍋の使用も盛んであった。京都の鍋は瓦質で受け口状に成形したものが分布する。岡山、広島周辺では土師質で口縁部を「L」字状ににしたものがみられ、山口県から北九州にかけては瓦質の足付き鍋が分布することが知られている。

基本的に西日本の鍋は東日本と異なり、耳を付さないものを主体とするが、わずかであるが、室町期の瀬戸内に岡山、香川などでも口縁部内側に横耳をつく鍋もみられる。

しかし、西日本の煮炊具の分布も決して一様でない。基本的に京都周辺では釜と鍋が対等に見られ、阪南部から畿内南部および東海の南海道と東海道を結ぶ太平洋側は釜を主体



第３図　中世後半の在地系煮炊具の分布（縮尺不同）

とした地域と言え（高知や東海の伊勢鍋や尾張・遠江などでは鍋であるが、形態的に球胴で口縁を内湾させる点で紀伊の釜と共通する形態と言える）、他の西日本地域は、大方鍋を主体とした地域と言えよう。それに、足付き鍋・釜、作りとして瓦質、土師質の違い、叩きの有無などによりバリエーションが加わってくる。

(2)東日本

東日本における古代の煮炊具は、11世紀段階にほとんどの地域において姿を消す状況にある。そして、12世紀から14世紀前半までの間は、ほぼ東日本の全域において土器製の煮炊具は姿を見せない特異な状況であることは多くの人の指摘するところである。

それでは、13世紀段階の東日本の煮炊具はどのようなものが存在したのか。鎌倉において確認された煮炊具をみると、鉄製鍋とともに長崎の石鍋、伊勢系鍋（伊藤1992）および畿内産の土師質釜など、その大半が西日本からの搬入品によって占められている（馬淵1989）。周辺地域では、鎌倉で検出されたと同様な伊勢系鍋、土師器鍔釜などを検出させ

る遺跡が、わずかであるが存在することが知られている。このような鎌倉の状況は東日本全体に認められる状況ではなく、むしろ消費都市鎌倉の特殊性と考えるべきである。

東日本における初期の在地製の煮炊具は、14世紀後半に北関東の群馬、埼玉を中心に内耳鍋が出現することが確認されている。この地域は13世紀後半以降在地産の片口鉢や壺の生産が確認されており、それらと同一工人が14世紀後半代に鍋生産を開始したものと推測される。同一工人が生産したと推測する理由は、口縁部が極めて類似した形態の片口鉢と内耳鍋が共伴する事実があり、さらにそれらと共に14世紀代に比定される常滑や古瀬戸の製品が検出されていることから、14世紀後半頃から同一工人による生産が開始したものと推測される（浅野1991）。この鍋は瓦質の作りで、年代が下がるとともに薄作りとなっており、16世紀初頭まで北関東で検出されており、最近、群馬県安中市において15世紀後半ないしは16世紀初頭頃の鍋の窯跡が検出された（千田1995）。

同種の内耳鍋は、東海から東北地方にまでその分布を確認することができるが、年代的に横並びになるのは15世紀前半ないしは15世紀中頃以降のことと思われる。東海地方の製品は器面にハケ目調整を施しており、同種の内耳鍋は三河から遠江さらには駿河あたりまで分布を確認することができるようである。中世前半代から生産されていた隣接する伊勢系の鍋、釜に整形の特徴が類似することから何らかの系譜上の関係を考えてもよいのかもしれない。これらは、15世紀中頃から16世紀さらには17世紀段階まで生産されるとする考えもあるようだ。長野県から山梨県にかけても一つのまとまりをもった形態の内耳鍋の分布が確認されている。この地域の鍋は北関東などのものと形態的に類似するが、焼成がやや軟質な土師質のものを主体とする点で北関東のものと異なる。関東でも現在の茨城県から栃木県にかけての地域では体部から底部にかけて丸く成形し、焼成のやや悪い土師質の製品が主体である。

東北北部の青森などでは古代末の擦紋土器文化時代にすでに鉄製鍋の出土が確認されており、合わせて土製の内耳鍋の出土も僅かであるが出土している。しかし、これらの土製内耳鍋が中世に至っても継続的に生産されていたとは確認できていない。むしろ、鉄製鍋の存在のみが目に付く状況の方が強く、東日本全体の中でもこの地方の鉄製鍋の優位性を十分に可能なことと言えなくもない。その後、中世後半に至っても東北北部地域に関しては土製煮炊具の確認はされていないが、東北部の福島、山形米沢付近においては15世紀後半から16世紀初頭頃と思われる時期に瓦質ないしは土師質の内耳鍋の出土が確認されている。関東などの内耳鍋と形態の上で類似性が指摘でき、何らかの関連性を考えてみる必要もあるかもしれない。

北陸地方においても、煮炊具は他の東日本同様に11世紀以降激減し、13世紀代までわずかに土鍋、土甕が確認され、一部に客体的に畿内産の煮炊具を出土させる遺跡が認められ

るのみである。中世後半に至っては一層、その姿を確認することができないのが現状である（北陸中世土器研究会1991）。

東日本全体を見たとき、中世前半においては確かに、土器製の煮炊具の存在はほとんど確認されていない。しかし、14世紀後半以降においては東北の北部地域、北陸、南関東においては引き続き検出されない状況を呈するが、それ以外の地域で一世紀を越え、継続的に生産が行われている事実を認めることができよう。

従来、煮炊具の分布は、西日本においては古代以来継続的に存在するところも見られ、継続的に生産が行われていない地域においても13世紀段階以降、新たな器種の出現を含め、面的な広がりを示すものと認識されてきた。そして、その対置に無煮炊具地域としての東日本の位置づけがなされた。鋤柄氏は西日本においても瀬戸内に見られる足付き鍋の分布や畿内における鍋・釜の共存状況から、畿内周辺部を除外すれば、東国も西国も鉄鍋製品とあわせ鍋文化としての基層の上に乗っていると考えられると述べている（鋤柄1995）。

しかし、民俗的な事例でも言われるように、囲炉裏と竈に象徴される文化的差は、やはり東西地域には明確に存在するものと判断されるならば（馬淵1989）、それは、東日本の煮炊具には土製、鉄製問わず、器内面に耳を有する点に象徴されるのかもしれない。

さらに、東西両地域を比較したとき、無煮炊具地域の問題をたびたび述べたが、東日本のように搬入品を含め、時間的にも空間的にも広範にわたり土器製煮炊具の皆無な状況は、我々が考える以上に東西日本の多様な状況と一元的経済状況でないことを想定させるものである。例えば、鉄製煮炊具の存在などはその典型かもしれない。土製の煮炊具の欠落は鉄製煮炊具の存在により、互換されると一般的に考えられているが、短絡的にそこに導くこともできない。しかし、東北北部から北海道における鉄鍋の検出量は関東以西に比較したとき極めて多くの量である（越田1984）。また、東日本を見たとき内耳鍋の出現には明らかに鉄鍋模倣のもとに生産が行われており、その形態変化は独立完結的なものでなく、時代が下っても一層鉄鍋に近い形態の製品が多く見られ、常に模倣の対象としての鉄鍋の存在が継続的に存在する状況がそこには確認する事ができ（浅野1991）、東国の土製煮炊具の出現には、先に触れた貯蔵具、調理具が広域流通品にその祖型を求めたように、鉄鍋に祖型として強く意識されるものとして位置づけられたのであろう。鋳物は、その生産形態が比較的に汎日本的な共通性の基に行われていた可能性などもあり、製品自体の広がりとともに鋳物工人の移動による広域的な製品の広がりが想定されているが、東西日本を比較したとき、内耳鍋の耳の有無と言う形態的差に見られる独自性は鉄生産の成立に東日本固有の発達を想定することも必要ではないのだろうか。

Ⅴ．食膳具

中世の食膳形態は極めて豊富な状況である。中国陶磁、古瀬戸、瓦器、土師器など磁器から土器まで様々な素材の食膳形態が存在した。しかし、それらが列島すべてに等しく分布していたわけでもない。先に述べた土製煮炊具同様に東日本においては独自な食膳形態の出現が極めて希薄な状況を示しており、食膳具に対する使用価値観の相違をそこに認める必要があるようだ。実際、豊富な食膳形態に関しては階層的な使用差なども考え合わす必要があろうし、さらに地域間における食膳具に対しての価値観の相違を考慮するならば、この器種も列島を一元的に扱うことのできない状況と言えるかもしれない。

(1)西日本

畿内には瓦器椀が分布することはよく知られていることである。

瓦器椀の出現は11世紀前半代に大和で最初に出現し、次いで周辺地域、さらに四国、九州などにおいても12世紀後半までには出現をみた。しかし、この瓦器も西日本全域にその生産が開始された訳ではない。かなりの地域で、瓦器以外の食膳具が生産されていた事実も見逃すこともできない（橋本1987、菅原1989）。

備中、周防を中心とする地域では、11世紀末から14世紀にかけて瓦器椀の生産は認められず、乳白色の土師器椀が生産されていた。備前、備中、備後などの諸国で出土していたこれらの土器は、いわゆる「早島式土器」と呼ばれていた一群の土器である（武田1994）。周防方面で検出されていた土器は、瓦器の範疇に入れて考えられていた。

瀬戸内の播磨、讃岐には須恵器椀が分布することが知られている。

播磨などの地域では、もともと須恵器生産が盛なところである。取り分け播磨の神出・魚住窯、讃岐の十瓶山窯、備前の亀山窯などで生産された擂鉢や甕等は、中世の広域流通品として各地にもたらされるが、同時に焼成された椀・皿類は一国ないしは近隣諸国に分布するのみであった。他に須恵器椀を生産する地域としては、瀬戸内を中心に小規模な生産が認められた。兵庫県中山窯、岡山県勝間田窯、板井砂窯、広島県旦ヶ原窯、小越窯等がある。いずれも古代末か中世初期に衰退する。また、熊本の下り山窯では、口縁部を外反させるものと玉縁に作り出すものがあり、底部外面をナデ調整し、体部内面をミガキ調整しており、白磁模倣の特異な須恵器椀が生産されている。

西日本の平安時代一般に10世紀から11世紀にかけて、黒色土器が主体的に分布することが知られている。そして、その大半の地域が12世紀段階に瓦器にとって替わられるわけであるが、一部の地域では中世中頃までこの製品が継続的に生産されることが知られている。最も顕著な地域が近江の湖東から湖南にかけての地域である。製品は内面黒色処理をした

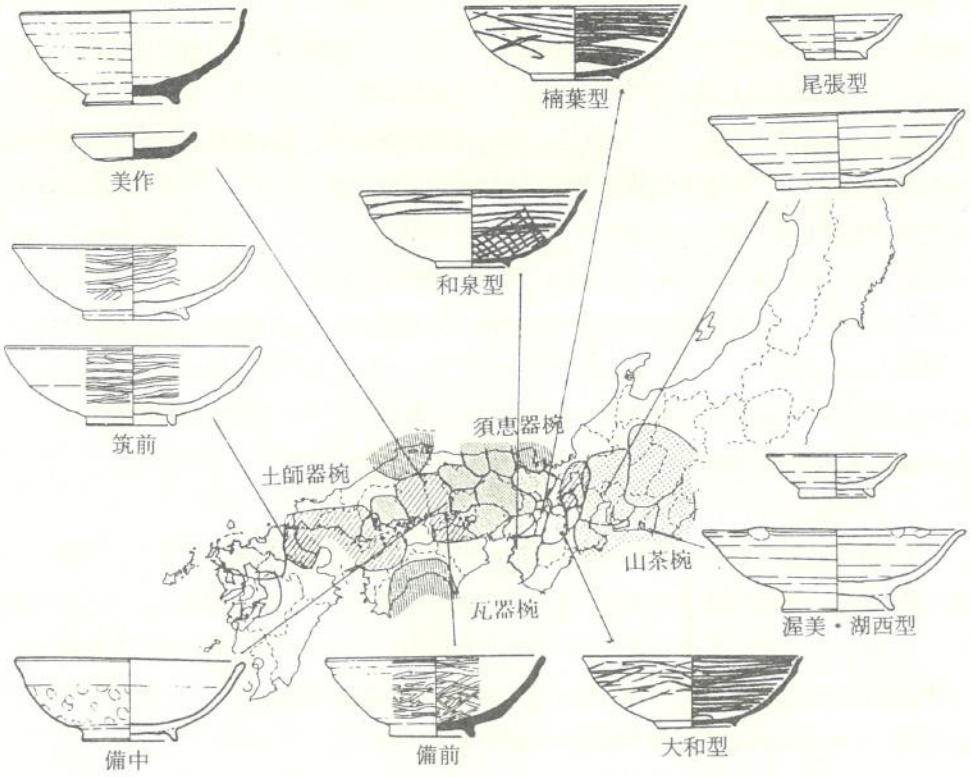
黒色土器A類を主体に検出されている（森1992）。

(2)東日本

西日本に対して東日本の土器製の食膳具は極めて少なく、東海地方を中心に瓷器系製品の分布を確認するのみである。

古代においては尾張、美濃などで生産された灰釉陶器が東日本全体に流通していた実体がありながら、12世紀以降に生産された山茶碗は、その流通範囲は一国ないしは隣接の数国を対象としたある意味では在地産土器へとその実体を変化させていた。この山茶碗生産は尾張、美濃、三河、遠江に限定され、流通範囲もこれらの諸国ないしは近隣諸国のみを主体と、これらの地域の一般民衆の日常雑器として流通した在地製品と位置づけられるものである。一部、12、13世紀代において東北地方南部から西は関西地方まで、その分布が認められるものの、それらはそれぞれの地域の一般民衆まで流布したものとは考えられない。

山茶碗生産は尾張では11世紀後半には確立しており、比較的遅い東濃でも12世紀後半に



第４図　12世紀代の食膳具の分布（Ｓ＝1／5）
（分布図は、鋤柄俊夫、1995「用途にみる土器文化の地域性」）

は確立をしている。そして13世紀段階においては生産量が増大し、14世紀代になり次第に生産を減少させており、その流通時期には地域差があるようだ（藤沢1994）。

いずれにしても、瓷器系のこの山茶碗も東海地域では畿内を中心とした瓦器椀同様な在地使用を前提とした日常容器としての位置づけがなされるものであった。そして、この山茶碗使用が激減する15世紀以降における東海地方の食膳具は、古瀬戸、大窯で生産された食膳形態に転換するとは思えないことから、この地域においても15世紀以降の食膳具の希薄さが指摘されよう。ここにおいてもやはり漆による互換の可能性が十分考えられることだ。

東日本の他地域では、西日本の瓦器、東海地方の山茶碗に対応すべき、在地産土器の食膳具をほとんど確認できないのが実状である。従来は、製品の存在が確認されていないと言う意見もあったが、安価な渋下地漆の出現等を踏まえるならば一層、漆椀が互換品として消費されていたと考えるのが自然であろうか（四柳1990）。

最後に、土師器皿について見てみたい。この製品の機能と用途に関して地域的にかなりの異なりを示しており、議論の多いところである（鋤柄1994）。例えば、「橘直幹申文絵詞」に土師器皿に物を載せて、売買行為が行われている。このような絵詞や畿内における中世遺跡からの出土状況は決して日常的食膳具としての機能を逸脱するものとは判断できない。しかし、一方、東日本の各地で確認されている土師器皿は、その出土状況から安易に日常性を強調できない一面がある。むしろ、非日常的な寺院ないしは墓跡などで、単発的な出方をする場合が多い。大量消費遺跡としては平泉、鎌倉等があり、これらの都市的な場では貴賤が密接して共存する状況であり、饗宴の場の拡大の中で、一般民衆への使用の消費の定着があったと解されている（吉岡1995）。食膳具の欠落と言う点で、東日本ではこの土師器皿に関しても13世紀までは東日本全域に分布を示すが、14世紀以降になるとロクロ土師器のみに限定され、さらに東北北部地域に至っては、14世紀以降ロクロ土師器すら姿を消してしまうが、この欠落範囲は中世後半の土製煮炊具の欠落分布域と比較的似かよった地域と言え、この地域の土器に対する特殊性が指摘できよう。

以上見てきたように、食膳具に関しても東西日本でかなりの相違があることが判る。食膳形態自体は、例えば鎌倉や北陸各地に中国陶磁を中心に、かなりの量のものが拠点的にもたらされている。しかし、それらの多くが地域的な広がりを持って一般的な食膳具として使用されたかは別である。むしろ、中国陶磁などの製品は地域間による地域的な価値差を考慮しても全国的な庶民層の日常的な雑器としての位置づけは到底できるものではないであろう。東日本における土器製食膳具のなさは西日本とは明らかに異なる価値観をそこには想定しながら、資料を分析する必要があるのかもしれない。

そのひとつには、東日本における古代土器生産体制の終焉のあり方と東海以西に見られる土器生産体制の中世への転換への異なりなども考える必要もあろう。また、土器生産に見られる古代との関連性や生産体制をも念頭に置く必要があるのかもしれない（宇野1984）。また、他の互換品となるべき、漆製品などの手工業製品と手工業集団の存在なども列島を横並びに語れない一面もあろう。

Ⅵ. ま と め

以上、4形態の土器について大まかな状況を述べてきた。最初に触れたように在地土器は広域的な流通品に対して狭域に分布する土器を指す場合が主で、その焼成の違いはあまり問題ではなく、日常性の強い土器を考えた。そして、瓷器系、須恵器系の在地土器ともに、とりわけ中世的な独自の発生を遂げた瓦器（瓦質土器）、さらに土師器系の在地土器が各地に展開したが、東西日本両域を比較したとき、日常容器の大半を在地土器に頼った西日本に対して、比較的品薄な東日本と評価できよう。特に、煮炊具と食膳具にその違いが顕著であったことが指摘できる。

中世前半代においては、貯蔵具と調理具のあり方においては機能的差異を見いだすことは出来ず、広域流通品と地方に形成された在地窯製品とは分布圏の大小は指摘されようが、補完的な関係というよりも互換的関係の方が強く、地域間分業的な形態をとったと言うべきであろう。

とりわけ、調理具である擂鉢については、広域、狭域を含め中世全般にわたり全国的な分布が確認できることから、在地土器生産の全国的な普遍的存在を証明するものであり、ある一定の地域性を探るに貴重な資料とも思われる。

比較的その分布に疎密のある貯蔵具に関して、14世紀後半以降の在地土器生産の消滅に重要なポイントがあるようにも思われる。例えば、東日本と西日本との間では備前窯に対する常滑を対置させ、先に述べたように東日本でも常滑の甕などが一定量出土させる遺跡は南関東域のみであり、在地土器生産の大幅減少と言う事実を広域流通費に互換することとしてすべて払拭できるわけでもない。もっと言うならば、西日本では中世前半に見られた東播系などの貯蔵具は中世後半に多数生産された備前などに形態的、機能的、コスト的にスムーズに転換するのであろうか。東日本の貯蔵具を見る限り、中世後半に常滑が主体的に流布しない状況は、一般的庶民層からさらに上の階層まで陶器製貯蔵具からの脱却があったものと考えられなくもないのである。機能的な互換性などを今後、十分吟味する必要はあろうが、木製品などへの互換なども検討する必要がある。

煮炊具を見たとき、14世紀後半以降の西日本においては、在地土器の多くは瓦質土器に

転換し、次第にその器種も増大傾向にある。東日本においては14世紀後半代に前代から瓦質生産を行ってきた北関東を中心に内耳鍋などの生産を開始させるなど器種の増加と、生産量の増加が確認される。また、従来から在地土器生産のない関東甲信地域、さらには東北の各地において15世紀前半から後半段階には瓦質・土師質鍋、擂鉢の分布が確認でき、西日本との同質化と評価される（吉岡1995、浅野1991）。しかし、東北北部、北陸に地域においては関東に見られるような土製煮炊具の復活現象はなく、中世前半同様、鉄製煮炊具の優位性を考えなければならない状況はある。

生産と流通を考えた時、珠洲においては白山社を軸とした構造が指摘され、東海諸窯においては尾張国司や在地官人が院や荘園を寄進し、その影響があったともされる。そして、流通においては伊勢や熊野社との関わりが想定され、大量に関東にもたらされたとされ、その背景に寺社勢力や種々の権力機構との関係が考えられるものもあった。楠葉の瓦器や山茶碗などの生産なども様々背景が推測されるところである。また、東北諸窯においては在地領主層による独自の生産への関わりが強調されている。しかし、全国的に考えを巡らしたとき、多くの在地土器がもちろん広域流通品のような生産、流通形態を示す訳ではない。また、西国の瓦器椀、土師器椀が楠葉のような生産形態として一般化される状況でもなかったであろう（橋本1995）。同一地域においても時代とともに変質してく状況もあり、多様な生産体制が地域ごとに設定されることを考えるべきかもしれない。

個別遺跡における在地土器の組成については全く触れることは出来なかったが、比較的在地土器生産の増大化した中世後半を比較しても、南関東のように都市鎌倉が消費地として形成され多くの消費財を西国に求め、その状況は鎌倉政権崩壊後も引き続き、消費地としての地域性を形成し続けると言う特異な地域を形成し、周辺の在地土器には全く目を向けない状況があった。同様に、北東日本海域のように広域流通品に依存する状況が強く、在地土器の器種は少ない地域もある。畿内などの地域においては消費としての都市部と周辺部との在地土器使用は大きな格差を認められない上に、京都などの都市においても瓦質、土師質などの比重は極めて高いことが指摘され、遺物の階層性を判断しづらい状況がある。また、北関東や信濃などでは15世紀から16世紀にかけての城館跡などでも在地土器の比重は極めて高いことが指摘でき、寺院や墓地等の特殊な遺跡を除き、遺跡の階層性を遺物の種類のみでは明確に分離できない状況などもあり、遺跡の内容とともに地域間、地域内での詳細な組成比較の検討を要するものと判断させる。

広域流通にみる流通構造の相違、生産構造にみる支配状況の差、内耳鍋・無耳鍋・釜に見られる生活様式の異なり、漆椀・瓦碗・山茶碗に見られる嗜好の相違、遺跡の階層差と陶磁器の関係など、単に広域・狭域の土器、陶磁器の分布のみではなく、様々な要素についてさらなる検討の必要がある。

Ⅶ．おわりに

中世在地土器研究は、畿内を中心に活動を始めた中世土器研究会によるところが大きい。さらに近年のこの研究会の全国的な視野に立っての研究活動は、各地に中世土器研究の啓発を導き出し、詳細な在地土器の編年と細分、さらには列島規模での比較検討へと深化し始めた。しかし、個別地域においては、未だ在地土器の解明が不十分な地域や在地土器4形態間においてもその分布から流通圏の異なりが認められるものもあり、一元的でない地域性を見いだすことができる。そこには埋蔵文化財調査の疎密と言う現代的問題を留保するとしても、ものに対する価値観の相違や流通形態のあり方など、単に考古学的研究のみでは解明では不十分な点もあろう。今後、個別遺跡の考古学的な研究の深化の必要性とともに、文献史学や民俗学的な成果との協業の必要性は強く感ずるものである。

（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

引用・参考文献

赤羽一郎「中世陶磁器の流通―常滑窯製品を追って」『中世の風景を読む』3　境界と鄙に生きる人々　新人物往来社　1995

浅野晴樹「東国における中世在地系土器について―主に関東を中心にして1―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集　1991

飯村　均「福島県における中世陶器生産の様相」『東国土器研究』第1号　1988

伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号　1992

荻野繁春「財産目録に顔を出さない焼物たち」『国立歴史民俗博物館研究報告』25　1990

荻野繁春「中世西日本における国産貯蔵容器の地域的様相」『福井工業専門学校研究紀要　人文・社会科学』第26号　1992

荻野繁春「中世西日本における国産貯蔵容器の分布」『福井考古学会会誌』第11号　1993

越田賢一郎「北海道の鉄鍋について」『物質文化』42　1984

菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集　1989

鋤柄俊夫「大阪南部の瓦質土器生産(2)」『中近世土器研究の基礎研究』　1989

鋤柄俊夫「用途にみる土器文化の地域性」『帝京大学山梨文化財研究所所報』第25号　1995

鋤柄俊夫「瓦質土器」『概説　中世の土器・陶磁器』1　1995

千田茂雄「群馬県安中市における瓦質陶器窯跡の調査」『中世土器研究』79号　1995

橋本久和「中世土器の製作技法ノート(1)」『中近世土器の基礎研究』　1987

橋本久和「中世社会と土器研究」『概説　中世の土器・陶磁器』　1995

藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号　1994

馬淵和雄「囲炉裏と鍋と」『月刊百科』319　1989

森　　隆「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人の系譜について」『中近世土器の基礎研究』1992

森田　稔「東播系須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』3　1986

吉岡康暢「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集　1991

吉岡康暢「食と文化」『日本通史』第8巻　岩波書店　1994

吉岡康暢『中世須恵器の研究』　1994

四柳嘉章「考古学における漆器研究について」『土器からみた中世社会の成立』　1990

脇田晴子「中世の商品流通と独占権」『中近世土器の基礎研究』　1990